

休み書いた。

——南無ダ、ダガバジ舐瓜——

榮治も立つて来て見てゐる。

『高橋君は、筆で書くとうまいですね』黒石が言つた。

『箸を二本持つて来い。』

それを飯粒で紙の両端にまいた。

『自動車に乗つて宣傳しなければならぬ』

僕は言つた。

罐に這入つた刻みの西洋苺を、黒石が呉れたので、僕はマントのポケットへそれを藏つた。

朝鳥の所で徴發したパイプで飲んでみた。

好い香りがする。

『僕も出掛けませう』

『君が心臓麻痺を起して斃れたら、君の屍が臭いと寄り付けないから』